

第6回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

朝雲光る

奈木 正次（静岡県沼津市）

奈良倉山



白簾史朗氏講評

朝焼けの富士、赤く色づいた富士山の上空に、これまた色づいた雲が横に流れている。富士山の位置、雲の入れこみ、質感の描写、全体のバランス。すべてに非の打ちどころない出来栄で、富士山の端麗な美しさをみごとに表現している。こうした場合、一般的にはどうしても、もっと空が切られ、下方が多く入ってしまうもので、それが作品の出来栄を大きく損なうことになる。そのことを意識してのフレーミングは完璧ともいえ、調子の美しさも、それに花を添えている。

推薦

三ツ葉ツツジと雲海

山賀 一男（神奈川県横浜市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

作者はミツバツツジといているが、これはトウゴクミツバツツジである。題名に少々難があり「・・・・と雲海」では情景を描写しきれていないので一考を。だが、最盛期の花むらを前景にはるか遠く富士を配した構図は秀抜で難をつけようがない。深い被写界深度でしっかりと対象を捉え、花むらと右方上部の富士山がみごとに調和、典型的な「いの字」構図を形成する。富士山の手前の山稜が雲でかくされたことが、富士山をより高く、雲上に押し上げている。雲海がやや左方に傾いているのが気になる。

推薦

晩秋

岩田 修二（静岡県駿東郡）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

雁ヶ腹摺山からの富士山。もうすっかりおなじみとなった構図であるが、今回までもっとも多く、最優秀賞から推薦、特選、入賞に取り上げられたアングルである。それだけに前回よりもすぐれた作品でなければ、上位に入選することはない。第3回最優秀賞の奈木正次氏の作品に匹敵するもので、朝の斜光をうまく捉え、手前のカラマツの色の冴えとともに、この山の売りものである、十二ひとえと呼ばれる山肌の重なりをみごとに表現している。これでもうすこし、右方を切って構図をととのえたら最優秀賞も夢ではなかった。

特選

夕照に光る雲 高津 秀俊（山梨県大月市） 高畑山



白簾史朗氏講評

実に美しい夕空である。日没後の夕焼けであろうが、何ともいえない微妙な色合いが思わず人を画面に惹きこんでしまう。露出値が適確であるため夕空とともに逆光となった富士の山体も半調で描写され、夕空の紅とマッチしている。欲をいえば、富士山が、画面上下の中心線にあり、下方がやや重く感じられることである。下方を画面上下の5分の1ほど切って、その分上部の画面上に空を広くとり入れると、美しい空がより広く入ってバランスもとれる。できたら左方もほんの少し切った方がよい。

特選

百蔵山の夜明け 北沢 清行（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

登るにやさしく、富士山の展望も良好な百蔵山は、いままでどうしたことか、あまり良い作品に恵まれなかった。この作品はそうした評を一気に吹き飛ばすような格調高い百蔵山の朝富士である。富士山頂からなだれ降りる美しい左右の傾斜、その均勢とれた線をいっぱいに取り入れ、しかも山頂を中心線のやや左方に置いた構図はぴたりと決まっている。

単純であるが、それゆえに力強く、高度感にみちている。オーソドックスな強味といおうか、単純明快に富士の美をつかみ出したといえる作品。

特選

秋景 八巻 長子（山梨県中巨摩郡） 牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

撮りにくいアングルをみごとにこなした力量を評価したい。小金沢山や牛奥ノ雁ヶ腹摺山は、そこにいたるまでも大変な苦勞がつきまとう。さらにそこからの富士山はまことにまとめにくい。こうしたハンディを克服したこの写真は貴重なものだ。朝の光に色づいて山稜をかすめるガス、それが晩秋近い富士の山肌と色相対比となって画面を生かしている。強いていうと、これも左下方の小灌木がわずらわしい。これを切って画面をもっと上部にのぼすと秋空のひろびろとしたひろがりが出る。そこがちょっと惜しいが、このままでも充分、特選に値する秀作である。

入賞
瑞峰

瀬瀬 浩恭（岐阜県多治見市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

思い切って手前の山なみを切り捨て、雲上に浮かぶ富士の山頂部のみでまとめた。題名どおり格調高い富士の表現の好例である。

入賞
黄葉

丸山 敏章（山梨県山梨市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

晩秋の散りのこるダケカンバの黄葉があくまで澄んだ秋の空にくっきりと浮かぶ。題名にもう一工夫欲しいが、色彩の透明度がこの作品の売りものである。

入賞

雲光る

小林 博（山梨県大月市）

大蔵高丸・白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

まさしく題名どおりの情景。富士山の色調の沈みが冴えないが、その分雲の美しさで救われている。ほんの少し、下部を切って上方にのぼすともっとのびのびした画面となったろう。

入賞

厳冬の朝 奈木 正次（静岡県沼津市） 滝子山



白簾史朗氏講評

ぐっと迫った富士山の大きさに、ふだんはじゃまになる三ツ峠山の電波塔が気にならない。手前の山肌の沈み具合、富士の雪肌の色づき、これまた単純であるがゆえに力に充ちた画面好例。

入賞

奈良倉山秋終りの頃

加藤 公男（山梨県大月市）

奈良倉山



白簀史朗氏講評

まだらに新雪をまとった富士。葉のまさに落ちつくさんとする立ち木の上はるかに浮かぶ。これも単純化により、がっちりとした「この字」構成で秋の終わりを描写した作品。

入賞

春うらら 井上 和夫（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

春もやにうっすらとかすむ富士山を、手前のしだれザクラによって引きしめた作品。全体に淡い色調が春を表し、青と緑に対するサクラのピンクが色彩対比によって画面が散漫にならぬよう引きしめている。

入賞

桜咲く頃 山崎 哲男（神奈川県津久井郡） 百蔵山



白簾史朗氏講評

やや露出オーバーでサクラの花のピンク色が消えたのが惜しい。それと富士山の雪肌の質感が乏しいのが残念だが、サクラの取り入れ、富士山の位置どりは文句ない。プロビアでなく、アステアかベルビアにかえた方が花色がよく出る。

入賞

早春

加藤 泰郎（山梨県大月市）

岩殿山



白簾史朗氏講評

ちょっとおもしろいアングルを買う。手前に大きくサクラの花むらを入れこんだことで市街が遠くなり、目立たなくなった。左方の鉄塔を切ることを考えるともっとまとまりが出る。

入賞

雪化粧 松里 房子（東京都板橋区） 倉岳山



白簾史朗氏講評

富士山は遠くにある、といった概念をこの写真が打ち砕く。手前、前景の山体の黒がよく画面を引きしめ、徐々に淡くなりながら富士山につながる。高度感表現の正攻法的技法が成功のもと。

入賞
静穏

境 実 (神奈川県相模原市) 九鬼山



白簾史朗氏講評

構図的には右と下方を切るとカッチリまとまる。そうすれば画面、ことに富士山は露出オーバーにならなかつたろう。手前の露出値に引かれたのがオーバーの原因。

入賞

紅色に染る

大塚 康夫（神奈川県津久井郡）

高川山



白簾史朗氏講評

全体の描写は適確で申し分ない。ただ、左方の鹿留山の盛り上がり気になる。これを切り、さらにバランスをとるため、右方も少し切る。必然的に下方が切られ完成する。まず富士山を生かすことを考えたい。

入賞
湧雲

遠藤 潤（山梨県東八代郡）

本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

好条件をうまく写し止めている。ことに雲の動きがよい。右隅のボケが気になり、全体の露出オーバーで大分損をしている。もう半絞りアンダーにしたかった。

総評

審査員長 白籟史朗

昨年一年間は、天候不順が取り沙汰された、その前年までと比較して、さらに悪天候が日本を襲った。だが、ある意味ではこの天候の崩れが、富士山にとっては逆に幸いして、昨年の冬は豊富な降雪が富士山や周囲の山々をいろどって、白雪の富士山を撮影するのにこの上ない好条件を提供してくれた。

ところが、応募作品を見ると、どうやらこの好条件を生かし切れなかったように思える。雪と富士山をモチーフとした作品は多数あったが、その大多数は条件におんぶしただけのもので、作品的にはいまだし、の感があつた。

あまり好条件に恵まれなかった春から夏、そして秋の富士山を狙った作品は、いずれもすくないチャンスをよく生かして作品に仕上げてあり、好条件時だとかえって作者の気のゆるみがあるのではないか、と考えさせられるものがあつた。

全体的に見れば、昨年の総評でも述べたように、レベルは着実に上昇はしている。ただ、どうしても類型的になりやすく、安易さに流れるという悪いクセが目につく。

たとえば、体力的に楽な山頂に集中し、体力が必要とされるような山頂を敬遠する、という傾向が依然としてあり、それが各山頂によって、応募作品数の片寄りとなってあらわれている。

今回の応募者数は53名、前年比で4名の増加であり、応募作品数も220点と、25点の増加を見た。このことじたいは、このコンテストが年を追って各方面に浸透して行っていることの証左であるが、一方、3番山頂大蔵高丸一帯で89点という応募作品数や、4番山頂滝子山が2点しかない、という片寄りを見ると、ただ単に数の増加をもって良しとするわけにはいかない。ちなみに各山頂から富士山の応募点数を比較すると、1番40点で17点減、2番6点で2点増、3番89点で43点増、4番2点で4点減、5番7点で2点減、6番9点で7点減、7番15点で5点減、8番14点で増減なし、9番14点で9点増、10番6点で3点増、11番10点で8点増、12番8点で5点減という数字になる。応募者数を山頂別に見ると、1番25名で1名減、2番6名で2名増、3番31名で10名増、4番2名で3名減、5番5名で2名減、6番6名で5名減、7番7名で5名減、8番10名で2名増、9番11名で7名増、10番5名で2名増、11番8名で6名増、12番8名で1名減である。応募作品数と応募者数の増は比例しているが、このうち4番山頂滝子山がともに一番少ない。

応募作品全体を通じていえることは、レベルアップといっても、やや露出オー

バーのものが目につき、ことに富士山の雪肌が白く飛んでしまい、質感の描写がないことで、構図の不備がこれに次ぐ。相変わらず「お子さまお絵描き」の富士山を画面中心に置くものが多く、空部の空きが下部とバランスがとれず、せつかくの好条件を無駄にしている。

また、今回、最優秀賞、推薦、特選の6名中に初入選の新人が4名もいる。ベテラン中では過去、最優秀賞2回、推薦1回、入賞2回の奈木正次氏がまたも最優秀賞、地元大月市からやはり過去入賞3回の北沢清行氏が特選となっている。

過去5回のコンテスト中、最優秀賞1回、推薦2回、入賞3回の佐野文隆氏、おなじく最優秀賞の竹田辰巳氏ほか、推薦、特選を射止めた高村茂氏、小林和義氏、流石匠氏、広瀬雅英氏、谷地光明氏、天野喜夫氏、佐野弘子氏、藤本紘一氏、梶原正剛氏らベテランの多くが、今回惜しくも選にもれ、また応募がなかったが、井上和夫氏、瀨瀬浩恭氏、山崎哲男氏、加藤泰郎氏、松里房子氏、境実氏、遠藤潤氏、加藤公男氏、丸山敏章氏、小林博氏らのベテラン作家たちは健在であって、それぞれに個性ある作品で入選された。

ただ、今回考えたことであるが、応募作品数が増加し、それにとまなう質の向上が、このコンテストに大きく影響をあたえるのは必至で、それは近い将来、入選点数の増加ということも考慮する必要もあろうかと思う。質の向上についてはそれぞれの山頂からの作品が平均した数であることも必須条件で、また前回述べた、所定の応募票に正確に記入することも当然の義務で、かつ主催者に対する礼儀と考える。

また、奈良倉山と交代した笹子雁ガ腹摺山についてであるが、今後は滝子山とともに4番山頂としたので、従来どおり作品を寄せてほしい。